

B-2 当科における t(4;14) 転座型多発性骨髄腫の検討

○中村裕一、伊藤善啓、島田恒幸、脇本直樹、掛川絵美、別所正美

埼玉医科大学病院血液内科

【目的】 t(4;14) (p16;q32) 転座は多発性骨髄腫 (MM) の 15-20% にみられ、予後不良因子の 1 つと考えられている。当科にて経験した本転座を有すると考えられた症例について検討した。

【対象・方法】 当科初診となった MM106 例の骨髄検体につき RT-PCR でスクリーニングしたところ、18 例 (17%) が IgH-MMSET 陽性であり、t(4;14) 転座陽性と考えられた。これらの症例について臨床的特徴を検討した。【結果】 t(4;14) 陽性例は診断時の年齢が平均 62.4 歳 (45~72) であり、IgG 型 10 例 (56%) IgA 型 8 例 (44%) であった。7 例 (39%) は診断時には無症候性であったが、うち 1 年以上経過観察した 5 例は全例が 1 年以内に症候性のものに進展した。6 例で脊髄圧迫性の腫瘤形成が、3 例で髄外腫瘤の形成がみられ、2 例では髄膜浸潤が認められた。経過観察できた症例の診断時からの平均生存期間は 15.9 ヶ月 (0~41+) であり、3 例は診断後 6 ヶ月以内に死亡した。【考察】 今回の検討では、t(4;14) 陽性 MM は発症年齢が比較的 low、診断時には無症候性のものも多くみられたが、病勢の進展は早く、従来型の治療には抵抗性である場合が多い。しかし、本群はボルテゾミブなどの新規治療薬が奏効する場合が多く、早期に診断された場合にただちにこれらの薬剤を用いた治療を開始すべきかどうか今後の検討課題と思われる。